

会議報告

さけます関係研究開発等推進会議

あたち ひろやす

安達 宏泰（北海道区水産研究所 業務支援課）

はじめに

平成 26 年 8 月 6 日に札幌市において、「平成 26 年度さけます関係研究開発等推進会議」を開催しました。本会議は、さけます類に関する研究開発や個体群維持のためのふ化放流について、関係行政・試験研究機関及び増殖団体等との情報交換を密にし、連携強化を図ることにより、さけます類に関する総合的な研究開発等を効率的かつ効果的に推進することを目的に設置したもので、研究開発の計画・成果等に関する情報交換と連携研究の可能性等を検討する「研究部会」、研究開発等の成果普及・情報交換とニーズの把握を行う「成果普及部会」で構成されています。

研究部会

9 時 30 分から水産庁、8 道県試験研究機関、水産総合研究センター関係各研究所および 5 道県水産行政部局、2 大学の 73 名参加の下で「研究部会」を開催しました。北海道区水産研究所谷津所長の挨拶の後、議事に入りました。

・各機関の研究開発の実施状況等 北海道区水産研究所が示した各道県の試験研究機関および水産総合研究センターの平成 26 年度のさけます関連調査研究課題の一覧表に沿って、各試験研究機関から平成 26 年度研究計画の補足説明および平成 25 年度研究成果情報が紹介されました。

研究成果のトピックスとして、岩手県水産技術センターから「東日本大震災時に放流されたサケの 3 年魚回帰状況」、水産工学研究所から「岩手県山田湾におけるモニタリングシステム」が紹介され、質疑応答が行われました。

また、各試験研究機関が行った平成 25 年度の標識放流結果と平成 26 年度の標識放流計画について北海道区水産研究所が報告し、変更等があった場合には北海道区水産研究所さけます資源部へ報告していただくことが確認されました。

・特別講演 北海道大学大学院農学研究院環境資源学部門の荒木教授による「ふ化放流魚と野生魚の相互作用」と題する特別講演が行われ、サケ科魚類においても継続的種苗放流が野生魚集団への遺伝的影響は避けられないこと、対応策として「繁殖



写真 1. 「研究部会」会議全景。



写真 2. 「研究部会」の座長を務めた永澤さけます資源部長。



写真 3. 「特別講演: ふ化放流魚と野生魚の相互作用」を講演いただいた北海道大学の荒木教授。

殖成功率を下げない種苗づくり」と「ふ化放流以外の資源保全確保」への研究開発が必要との問題提起がありました。

・さけます類の来遊状況についての意見交換 各

機関から提供された情報に基づいて、平成 25 年度におけるサケ来遊状況の特徴について意見交換が行われ、当該年度における 5 年魚の増加は成長の遅れを反映したものであるとの見解で一致しました。

・その他 北海道区水産研究所から、平成 27 年 5 月に神戸で開催される NPAFC (北太平洋溯河性魚類委員会) シンポジウムを紹介し、各試験研究機関に積極的な参加を要請しました。

平成 25 年度に提示した「サケ自然再生産に関するプロジェクト」については、積極的な参加意思を示した試験研究機関が少なかったため、応募を見送ったことを報告しました。

サクラマス分科会の結果概要として、サクラマスの試験研究活性化のため、環境研究総合推進費(環境省)に「遺伝的攪乱が水産重要魚種サクラマスの生態的特性及び河川生態系へもたらす波及効果(仮題)」として応募する予定であること、サクラマスの資源評価モニタリング体制を充実させるため、共通のデータ収集フォーマットと調査マニュアルを作成すること等を報告しました。

成果普及部会

14 時から関係道県の行政機関、増殖団体、漁業団体等が加わり、209 名参加の下で「成果普及部会」を開催しました。北海道区水産研究所谷津所長の挨拶に続き、来賓を代表して水産庁増殖推進部栽培養殖課の平間栽培養殖専門官からご挨拶をいただいた後、議事に入りました。

・成果情報：地域特性を考慮した増殖事業の展開^{*1}
(1)サケの地域特性

北海道区水産研究所の伴ふ化放流技術グループ長が、サケは地域によって、1) 遺伝的特性、2) 来遊数、3) 来遊時期、4) 採卵時期、5) 放流適水温が異なることから、それぞれの地域に適応した特性についての理解を深め、ふ化放流現場に活かすことが効果的な増殖事業の展開につながるとの見解を示しました。

(2)北海道各地におけるサケ稚魚の耳石標識放流試験結果^{*2}

北海道区水産研究所ふ化放流技術グループの中島主任技術員が、1) オホーツク海区斜里川、2) えりも以西海区静内川、3) 日本海区千歳川での耳石標識放流試験の結果に基づき、サケ稚魚の生残に関わる要因は地域によって異なる可能性があり、各地域の特徴に合わせた放流手法を検討する

必要があると提言しました。

(3)本州日本海沿岸におけるサケ放流適期の検討

日本海区水産研究所さけます調査普及グループの飯田研究員が、放流時期別に異なる耳石温度標識を施された放流群の回帰状況について、3 月中旬放流群の回帰率がその前後の放流群よりも高かったことを報告しました。このことについて、餌生物量の多寡や対馬暖流が影響しているとの推論を示しました。

(4)岩手県におけるサケふ化放流計画見直しの試みについて

岩手県水産技術センター漁業資源部の小川上席専門研究員から、1) 岩手県のサケ回帰尾数と稚魚放流数、2) 過去の種苗生産計画見直しの事例紹介、3) 現在提案している新たな見直し、4) 直面する課題について報告されました。



写真 4. 「成果普及部会」会議全景。



写真 5. 「成果情報」での発表者。北海道区水産研究所：伴ふ化放流技術グループ長(左上)、北海道区水産研究所：中島主任技術員(右上)、日本海区水産研究所：飯田研究員(左下)、岩手県水産技術センター：小川上席専門研究員(右下)。

^{*1} 同様のテーマで開催した北水研さけます資源部ワークショップについて、本誌 26 ページに掲載しています。

^{*2} 詳しくは、本誌 15 ページを参照ください。

・情報提供

(1) オホーツク海における日本系耳石標識サケ幼魚の再捕報告

北海道区水産研究所繁殖保全グループの富田技術員が、ロシアの太平洋科学調査・漁業センターによる「2012年オホーツク海における降河後回遊期の人工ふ化カラフトマスとサケ稚魚の割合」に掲載されたサケとカラフトマス幼魚に関する情報を紹介しました。

(2) 北太平洋におけるサケ資源の現況と来遊見込み

北海道区水産研究所の斎藤資源評価グループ長が、1) 北太平洋のサケマス資源、2) ベーリング海のモニタリング調査、3) 平成25年度のサケ漁獲状況、4) 平成26年度のサケ来遊見込みを紹介しました。特に、今年度のサケ来遊数は前年を下回る可能性があり、地域によっては沿岸漁獲および河川捕獲が低迷することも想定されるため、関係機関の連絡体制を整備し、地場資源による種卵確保に向けての対応を協議するよう注意喚起を行いました。

・意見交換

全体を通じて、沿岸来遊期のサケの遊泳行動に関する質疑応答、標識放流されたサケ親魚の再捕情報についての照会がありました。

アンケート結果

本推進会議の参加者を対象に、今後の会議をより充実させるためのアンケート調査を実施しました。質問「会議内容は業務に役立つ内容でしたか」に対し、「はい」61%、「まあまあ」39%、「あまり」または「いいえ」0%で、「配付資料は役立つ内容でしたか」に対し、「はい」59%、「まあまあ」41%、「あまり」または「いいえ」各0%の回答でした。「業務に役立つ内容」や「取り組むべき課題」としては、主に道県機関からはサケふ化放流のあり方やオホーツク海及びベーリング海調査、民間増殖団体等からは放流適期の調査、回帰につながる増殖等が挙げられました。



写真 6. 「情報提供」での発表者。北海道区水産研究所 富田技術員(左)、北海道区水産研究所 斎藤資源評価グループ長(右)。



写真 7. 「意見交換」における質疑応答。

おわりに

本推進会議は、北海道区水産研究所と関係道県の試験研究機関、行政機関、団体等との情報交換を密にし、ニーズを把握して相互の連携強化を図り、さけますに関する研究開発並びに個体群維持のためのふ化放流を効率的かつ効果的に推進するために開催しているものです。さけますに関する様々な機関や団体が一堂に会して情報や意見交換ができる貴重な機会であり、ブロック推進会議とは異なる「分野別推進会議」に位置付けて開催しています。

会議終了後には、参加された皆様にアンケート調査へのご協力をお願いしており、寄せられたご意見、ご要望を踏まえ本推進会議をより充実したものとするよう努めて参りますので、関係者の皆様には今後ともご参加いただきますようよろしくお願いいたします。